

|        |                                                                                                                               |
|--------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 回数・コース | 関りを考える①                                                                                                                       |
| 日時     | 8月29日(土) 13:30~16:30                                                                                                          |
| 場所     | 歴史資料センター まなべこ(市内城東町2-3) 企画展示室                                                                                                 |
| 講師     | 伊藤 達矢先生                                                                                                                       |
| 概要等    | 【文化・芸術は生活に必要なもの?】私たちの生活の中で、文化や芸術は必要なものなのでしょうか?この講座では「文化的処方」を例に取り上げ、芸術や文化の必要性や可能性について考えます。講座では、グループディスカッションを通して、授業のテーマを掘り下げます。 |

## 1 文化・芸術は生活に必要なもの?(哲学対話の実践)

はじめに、今回の大きなテーマである【文化・芸術は生活に必要なもの?】について掘り下げるため、参加者で2つのグループに分かれ、哲学対話を実践しました。

哲学対話とは、普段当たり前だと感じていることについて参加者同士で問い直し、共に考えを深めていく対話の方法です。

伊藤先生が用意したテーマは5つ。

この中からグループごとに話したいテーマを選び、対話を進めていきました。

- ・芸術は生きる上で必要か?
- ・芸術を学ぶ意味はあるのか?
- ・人はなぜ芸術をつくるのか?
- ・素晴らしい芸術とは何か?
- ・その他

### ○グループ1

最初のグループは、「素晴らしい芸術とは何か?」をテーマに対話をスタート。

.....

「見て体感して、生きる力をくれるもの」

「圧倒される、自分では叶わないもの、自分の想像を超えるもの」

「でも、“素晴らしい”って誰が決めるのだろうか?」

「その時代ごと、人ごとに受け取り方が変わるのでは?」

「じゃあ逆に“素晴らしくない”作品って?」

「“素晴らしくない”作品なんて存在しないのでは?」

「それなら、有名な作品とそうでない作品、売れる作家と売れない作家はどうして生まれる?」

「見つけてもらえるかそうでないかの違い。運なのでは?」

「そもそも、素晴らしい作品と言われても具体的なイメージができない…」

「芸術の評価って?」

...

.....

伊藤先生の問いかけから、参加者の間でどんどん疑問や意見が飛び交いました。

## ○グループ2

2つ目のグループは、2つのテーマを組み合わせ、「どうして芸術は生きる上で必要か、そして人はなぜ芸術をつくるのか？」をテーマに対話をスタート。

.....

「芸術は必要。コロナ禍の時、音楽ライブに行って心が明るくなった。家族にとって大切な思い出。」  
「絵は楽しいときだけでなく、悲しいときにも描きたくなる。自分の心を復活させるために描いている。」  
「作品そのものよりも、作品に触れ癒されたり、美味しい・嬉しいと感じる“感性”にこそ価値があると思う。  
心を豊かにするためには芸術が必要。」  
「芸術・文化があるから、国同士がつながり、交流が生まれている。」  
「言葉がなくても気持ちを共有できる方法だと思う。」

メンバーそれぞれの実体験や芸術の持つ力について、話が広がりました。  
ここで伊藤先生から「芸術の正体は？」という問いが投げかけられました。

「良い方向であれ、悪い方向であれ、人の心を動かすもの。」  
「自己表現をすることが芸術。」  
「作者と受け手の一対一のやりとり」  
「音楽に癒されたり、友達とお茶をしたり、美味しいものを食べたり、日常に身近にあって暮らしを豊かにするもの。」  
...

.....

それぞれの意見が重なりながら、対話が深まっていきました。

## 2 文化的処方について

伊藤先生が所属する東京藝術大学での取り組みを中心に、『文化的処方』について学んでいきました。

.....

### ■ 東京藝術大学の使命(ミッション)

心豊かな活力ある社会の形成にとって芸術のもつ重要性への理解を促す活動や、市民が芸術に親しむ機会の創出に努め、芸術をもって社会に貢献する。

### ■ 第4期中期目標・計画の基本方針(抜粋)

これからの世界・社会においては、創造性や感性など人ならではの力、アーティストの役割が益々重要になっているため、アートの力による、または、アートと異分野との融合による、社会的課題の解決に係る教育研究・社会実装を全学的に推進し、SDG sの達成や Society5.0 への転換、well-being の実現、イノベーションの創出、地方創生などに寄与・貢献する。

### ■ ART 共創拠点の目標

#### ①社会が変わる

『日本の健康観』を変える。身体的健康と同じように精神的健康、社会的健康、そして、文化的健康も重要であることをあたりまえの世の中にする。

#### ②人が変わる

文化や芸術の力を誰もが認識し、生活に取り入れることができる。

### ■ 健康の定義(WHO 憲章より抜粋)

「身体的・精神的・社会的に完全な状態であって、たんに疾病または病弱の存在しないことではない。」

身体的な健康は数値化しやすいため、どうしても身体面ばかりが重視されてしまう。  
一方、精神的・社会的・文化的な健康は数値で表しにくく、その重要性が見過されやすい傾向にある。  
➡ こうした「数値化できない健康」の領域でこそ、芸術・文化が大きな役割を担っている。  
薬だけでなく「社会とのつながり」や「安心できる居場所」を処方する——  
『文化的処方』も現代社会における新しい“処方”の形。

(活動例)

- ・ヤギの目プロジェクト
- ・文化リンクワーカー
- ・ずっとび／うえのび
- ・フラッター
- ・同善病院(みのる一む、あおぞらカフェ) -東京都台東区
- ・すみた酒店(歴史影絵劇) -名張市

### 3 まとめ

わたしたちが生きる現代社会にとっての『文化的処方』の必要性や実践について学びました。

- 行政的公共:行政(政府や自治体)が提供するサービスや仕組み
- 市民的公共:町内会や地域の協会、集落の共同作業など、行政と個人をつなぐ役割

しかし、地縁(地域のつながり)や血縁、会社縁(会社組織でのつながり)は、価値観やライフスタイルの多様性が重視される現代社会に適しておらず、「市民的公共」は縮小傾向にある。

➡ そうした中で注目されるのが「文化縁」(＝アートコミュニティなど文化活動を通じた新しいつながり)である。

『文化的処方』とは、「野草の中から薬草を探す」ようなこと。

講義の最後に、伊藤先生から

「自分で自分に文化的処方を出す(用法容量と効能)」という課題が出されました。

参加者自身が考える、自分にとっての『文化的処方』をグループで共有し、生活や心の健康を支える文化活動について新たな気づきを得る機会となりました。